【桃山学院中学校高等学校エッセイコンテスト 特選】

「最後の十日、自然のままに生きて」高1　F．S.

私の曾祖母の死に際は美しかった。入居していた老人ホームで熱を出し、その近くの病院に入院することが決まった時は家族全員が肝を冷やした。「もってあと数日」医者からそう言われ、入院したまま延命処置を行うか、自宅もしくは元々入居していた老人ホームに戻って延命処置をせずに自然のままに死を待つか、その選択を実の娘である祖母は迫られた。最終的に祖母が下した決断は、元々入居していた老人ホームに戻ることだった。退院の日、学校が終わってから私は老人ホームへ向かった。こんな事態でなければ会うことができなかった。コロナ流行とともに会えなくなり、数年ぶりの再会だというのに、懐かしいあの声で私の名前を呼ぶこともなければ、数年前のようにシュークリームや御座候を大きな口で頬張る姿もない。私は、その日握った曾祖母の右手の感触を忘れることはないだろう。「今週が山」と言われて十日余り、曾祖母は祖母に看取られて静かにその人生の幕を閉じた。その十日余りの期間、浮腫んでいた曾祖母は本能のままに呼吸「だけ」をし、自然に枯れていった。ただ自然に、己のエネルギーを全て使うが如く。泣くことはなかった。ただ、曽祖母への感謝とこんなにも死は身近で美しいものなのかという恐怖、死は生物に与えられた定めの一つであることを実感した。

【桃山学院中学校高等学校エッセイコンテスト 優秀】

「迷惑は『かける』もの」　高2　H. A.

17歳。初めて電車で意識を失った。

外出先から家に帰ろうと電車に乗っていると急に視界がチカチカと点灯し出した。始めはただのめまいかと思っていたが、電車のスピードが増すごとに列車の揺れを全身に感じ、下腹部にありえないほどの重力を感じる頃には意識は朦朧としていて、まともに立つことができなくなった私はそのままドンと鈍い音を立てて床に倒れていた。

「大丈夫ですか。」と40代くらいの女の人が私の体を支えながら近くの座席まで誘導し、座席についたあとも隣でずっと背中をさすってくれた。10分ほど経ち最寄り駅に近づいていたため、もう降ります、と伝えるとその女性は降車ドアまで手を握って連れて行ってくれた。本当にありがとうございます、と何度もお礼を言っていたら、「改札まで送りますよ。」と言って、一緒に降車して、改札まで送ってくれた。

私はこの経験を通して、迷惑をかけないのではなく、自分がもし同じような状況になっている人がいたら真っ先に私が助けてあげよう、と思った。

私たちは誰かに迷惑をかけると、二度とこんなことを起こさないように、とその経験をまるで失敗のように捉えてしまいがちである。そうでなく、自分が助けてもらったから今度は他の人を助けてあげよう、と思えた時、その経験は失敗じゃなくて、自分が成長できるきっかけなんだと思うことができるはずだ。

【桃山学院中学校高等学校エッセイコンテスト 佳作】

「17歳の反抗期」　高2　T．K.

私は17歳で反抗期が始まった。一般的に思春期の反抗期は13～15歳で始まるらしい。中学生の頃あたりから、周りの友達の反抗期が始まり、親の愚痴を話していたのを覚えている。しかし、私は反抗しようという気持ちになったことすらなかった。異変が起こったのは、私が高2になってすぐの頃である。言い返そうと思ったことはなかったのに、親の言動に対してカッとなって言い返したのである。そこからは親に対して口答えするのが常となった。しかし、私は親にひどい言葉を言ってしまったことをずっと後悔していて、でも反抗してしまうという、親に対して矛盾した気持ちを抱えていた。

そんな中、私は6泊8日のイギリス修学旅行へ行った。修学旅行前夜も用意の件で親と激しめの喧嘩をしたので、最初はどんよりした気持ちだったが、イギリスは世界の広さを実感すると共に、本当に楽しかった。ところが、同部屋の友達と寝坊したり、夜お風呂に入らず寝落ちして朝に2人で焦ったりなど沢山のトラブルも経験した。私は普通あまり寝坊しないし、寝落ちすることもない。帰りの飛行機の中でふと今まで私が生活に困っていないのは親のおかげなんだと思った。そもそも、修学旅行に行けたのは親が働いてお金を払ってくれて、空港まで送ってくれたからだ。なんだか無性に感謝の気持ちが溢れてきて、親の言うことに一々口答えする自分が馬鹿らしく感じた。

旅を通じて、親への感謝を思い出せた気がする。

【桃山学院中学校高等学校エッセイコンテスト 佳作】

「大丈夫、世界は広い。」　高2　O. A.

少し難しい話をしよう。いくら「多様性を認め合おう」と言っても、その多様性をどうしても受け入れられない人はいる。しかしそれもまた多様性である。つまり「多様性を受け入れろ」と強制することは、「受け入れられない」という多様性を認めていないということになる。では多様性を認められなくて悩んでいる人に「多様性だから仕方ない、諦めろ」と声をかけるべきかといえば、それは違う。そんなときに使える魔法の言葉がある。「大丈夫、世界は広い」だ。

周りに自分の趣味を受け入れてもらえない私に向かって私の母はよく昔から「世界は広い」と言っていた。当時まだ世界を知らなかった私はずっとその言葉を否定していたが、今年ようやくその言葉に納得できるようになった。様々なSNSを始めて、国境を超えて人と繋がり、同じ趣味を持つ人たちに出会ってから「世界には同じ趣味の人がこんなにいるんだ」と思うようになった。生きづらかった毎日はまるで魔法をかけられたように楽しいものへ変わっていった。

最後に、今、周りに認められなくて生きづらい人にこの言葉を送ろう。「大丈夫、世界は広い。あなたが知っている場所だけが世界の全てではない。」今はこの言葉の意味が分からないかもしれない。納得できないかもしれない。ふざけているように聞こえるかもしれない。しかし、きっとあと数年もすればその言葉は現実となる。だから今はこの言葉を信じて生きてほしい。